

## オバマ大統領研究

—「核なき世界」および「差別なき世界」—

野呂 浩\*

## A Study of President Obama's World

—A World without Nuclear Weapons and Discrimination—

Hiroshi Noro\*

The main objective of this paper is to analyze two worlds; a world without nuclear weapons and a world without discrimination, both are central policies of President Obama.

President Obama said in his Prague speech that he seeks the peace and security of a world without nuclear weapons, since U.S.A. has a moral responsibility to act as the only nation that has used a nuclear weapon in war. This seems to be coming from President Obama's sincere reflections on the use of atomic bombs on Hiroshima and Nagasaki. However, examining a history of military strategies of the U.S.A., we learn that the origin of his speech content comes from the fact that some leaders of the nation, before the birth of President Obama, already feared that nuclear weapons would be used by terrorist groups. Their opinion on the ultimate choice for the security of the U.S.A. has been to eliminate all the nuclear weapons from around the world.

President Obama's other important policy is centered around whether he is able to make America really united. He clearly said that "Well, I say to them tonight. There's not a liberal America and a conservative America—there's the United States of America. There's not a black America and white America and Latino America and Asian America: there's the United States of America." This speech also seems to be coming from President Obama's unique view of equality on all races, groups or parties. However, if we look back at the history of the U.S.A., so many discriminatory policies, practices or unbelievable experiments have been done on black Americans in

---

\* 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター教授  
2010年9月9日 受理

particular. Therefore, it can be said that the past history and present reality is to be the underlying catalyst for the above speech.

Realizing a world free of nuclear weapons, even it originates from the U.S.A.'s own security, is a historical mission not only for President Obama, but every nation of the world. Since about 26,000 nuclear weapons in the world are closely connected with the fate of this beautiful planet of life and water: the Earth. Also, giving life to the Declaration spirit of "All are created equal..." is another historical mission not only for President Obama, but also every citizen of the U.S.A.. This is a great problem whether President Obama and every American can try their utmost to create a truly equal America.

As the first black President Obama works in Whitehouse now. The name of Whitehouse comes from the color of the building. President Obama, by balancing the appointment of both white leaders and black leaders, seems to be avoiding people thinking it ought to be renamed the Blackhouse.

## I

オバマ大統領は現在世界で最も注目を浴びている人物の一人である。「史上初のアメリカ黒人大統領」であり、初めて「核なき世界」追求を宣言した大統領でもある。大統領就任後9カ月程にもかかわらずノーベル平和賞を受賞する等、「核なき世界」を実現してくれる大統領として世界中の多くの人々に熱狂的に支持され、さながら世界の「救世主」が登場したかのような様相である。さらに、

あたかも「人種を超えた」あるいは、「脱人種」(ポスト・レイシャル)社会が実現したかのような興奮にも包まれた。しかしながら、雇用対策や経済再生が一向に改善されないことなども理由であろうが、オバマ大統領の就任時の高い支持率は、2009年末には50%を切り、2010年3月には40%台後半に急落してしまった<sup>(1)</sup>。

このようなオバマ大統領登場による現象を正確に捉えるには、見えにくい様々な背景を含めた冷静かつ客観的な分析が必要である。オバマ大統領が宣言した「核

なき世界」追求は、唯一の被爆国に住む者として、やはりその深層の分析を迫られる。筆者の個人的体験であるが、アメリカのある大学で就学していた 1972-73 学年度に、私は、「白人がよく口にするブラック・プロブレム（黒人問題）は、そもそも白人側に問題があると考えていたので本当はホワイト・プロブレム（白人問題）なのだ！」とあちこちで主張した。その私を、身に危険が及ぶ可能性があるとして、キャンパス内外を歩くときにいつの間にか多くの黒人学生たちが私のボディガードをしてくれるようになったことを思い出す。人種問題の根深さを実感した体験である。オバマ大統領の登場によって、そのような差別・偏見は減少しているのか。「核なき世界」構想、それに、「人種問題」の 2 点を主に検討し、オバマ大統領自身と大統領を取り巻く世界の実像を垣間見るのが今回の考察の主目的である。

## II

オバマ大統領は、ハワイ大学に留学していたケニアのルオ族出身である黒人の父親と、ハワイ大学の学生であったカン

ザス州出身の白人の母親との間に生まれた。彼の生い立ちから判断するならば、伝統的なアメリカ的価値観を受け継ぐ典型的なアメリカ人である。オバマ大統領はその自伝の中で、当然父親の影響もあるが、母の心の優しさ、寛大さに触れ、自分のよきところはすべて母親譲りだと認めている<sup>(2)</sup>。父親は後に母と離婚し、ケニアに戻り、46歳で交通事故のため死去。母は再婚し、息子バラクを連れて新しい夫とともにインドネシアに移った。バラクが6歳から10歳のことである。母は再婚の夫が亡くなった後、ハワイへ戻るが52歳で死去。複数の国、文化、宗教、価値観の中で育まれたオバマ大統領は、奴隷としてのルーツを持つ黒人ではない。母とともに日本にも3日間滞在した経験がある。鎌倉の大仏を見に行ったが、子供だったため抹茶アイスクリームの方により関心があったそうである。

(3)

オバマ大統領はキリスト教徒であるが、その特異な経歴に白人の偏見・差別感情も入り混じり、「イスラム教徒である」、「アメリカ市民ではない」、「アメリカ生まれではない」などという事実と反したイメージが今でも流布している<sup>(4)</sup>。

アメリカ国民である黒人、アジア系アメリカ人、ラテン系アメリカ人、白人アメリカ人がオバマ氏に最初に惹かれたのは、2004年7月の民主党全国大会での基調演説である。その演説が熱狂的な支持を得、一躍全国的に、さらには全世界に名が知れ渡った。「リベラルのアメリカも保守系のアメリカもない…あるのはアメリカ“合衆国”なのだ。黒人のアメリカも白人のアメリカもラテン系のアメリカもアジア系のアメリカもない。あるのはアメリカ“合衆国”なのだ。」<sup>(5)</sup>、「多が結び付き一つであるアメリカ」<sup>(6)</sup>は心地よい響きを持つ訴えである。オバマ大統領は選挙運動中から、人種、宗教、貧富、出身国等の違いを乗り越えることを繰り返し説いている<sup>(7)</sup>。

選挙向けスピーチの「アメリカという意味で皆が結び付いており、その再生には皆の協力が不可欠である」というメッセージには、白人票も得たいという願いが込められていたのであろうが<sup>(8)</sup>、複数の文化環境で育ったオバマ大統領の偽らざる心境が込められていたのは事実である。自伝の中で、独立宣言の文言に命を吹き込んだキング牧師などの苦悩を思い、「白人も黒人も、アメリカというコミュ

ニティーの一員としての自覚を持ち、彼らこそがよりよい歴史を創っていくのだ」と記しているほどである<sup>(9)</sup>。一つのアメリカを強く訴えること自体が、とりもなおさず現実に様々な超え難い壁が存在するということを物語っているが、ここからは「差別なき世界」創造に立ち向かうオバマ大統領の並々ならぬ決意が読み取れる。

### III

第2次世界大戦後、アメリカは他国に対する軍事的、経済的影響力を弱めてはいない。もちろん、全世界に対するアメリカの影響力を維持・発展させるためであることは自明の理である。しかしながら、帝国主義的な行動を取り続けるアメリカに対する反発が国内においても生じ、また、ベトナム戦争の敗北で、アメリカ社会には失望感が漂うこととなる。

2001年9月11日に、ニューヨークのワールドトレードセンターが航空機によるテロに襲撃される9・11事件、アメリカ同時多発テロ事件が起こる。即座に、対テロ対策として、ブッシュ政権はアフガニスタン、イラク攻撃に着手す

る。そして、イスラム原理主義を信奉するアラブ系人種によるテロ説が唱えられ、アラブ系住民はテロリストと看做され、イスラム教徒への嫌悪感が一気に高まる。

ブッシュ政権を引き継いだオバマ大統領は、2009年4月5日のブラハ演説で、核のない世界の平和と安全を追求する姿勢を明確に宣言した。すべての核兵器を全世界から廃棄するという提案は、アメリカ大統領としては初めてであり、アメリカ大統領として初の核なき世界実現の表明とも言われるが、これ以前にもヘンリー・キッシンジャー元アメリカ国務長官らがすでに核なき世界の実現を求める必要性を訴えていた<sup>(10)</sup>。テロリスト組織が核兵器を入手するのを防ぐためにも、核兵器を世界から廃絶しようという訴えである<sup>(11)</sup>。また、オバマ大統領自身も大統領に選出される前の2008年7月24日に、ドイツの首都ベルリンでの演説ですでに核なき世界に触れ、「核兵器のない世界」という目標を設定し、そのような世界の平和探求に着手すべきであると明言している<sup>(12)</sup>。2009年5月には、オバマ大統領とキッシンジャー氏らとの会談が行われ、核兵器のない世界へ向けての意思確認もなされている

<sup>(13)</sup>。

世界の安全保障上、最大の脅威はテロリストに核兵器が渡ることであるとオバマ大統領自身も述べている<sup>(14)</sup>。核保有によって、自国の安全が保障される。つまり、核抑止力で戦争を未然に防ぐという役割が果たされてきたことは事実である。しかしながら、テロ組織に核兵器が渡り、使用される危険性が高まっているのが世界の現実である。となると、自国の安全を守る一番確実な道は、それこそ世界から核を廃絶する以外になくなる。オバマ大統領は、原爆を使用した唯一の核保有国として行動する道義的責任があると演説するが、「核なき世界」を唱える背景にはこのような世界の流れがあり、オバマ大統領が初めて提唱したという訳ではない。あくまでもアメリカの自国の安全保障上の戦略から発している「核なき世界」論である。

アメリカのみならず、世界が恐れる「核テロ」とは、テロリストによる核兵器や核分裂物質の強奪、原子力施設への攻撃、さらに、放射性物質と通常火薬を組み合わせた兵器の製造等である<sup>(15)</sup>。これまでも、実際に核兵器のない世界を創り出すべく様々な試みが世界で行われている。

宇宙空間、大気圏内、水中、地下を含むあらゆる空間における核爆発を禁止する条約、CTBT (Comprehensive Nuclear Test Ban Treaty 包括的核実験禁止条約) は、100を超える国々が署名し、批准済みだが、未批准国の筆頭はアメリカと中国である。核兵器のない地域を創り、その地域内での核兵器の開発および保有を禁じる「非核地帯構想」により、南半球の大部分がすでに非核地帯となっている。また、宇宙兵器を禁止する構想には、宇宙への兵器配備や、人工衛星への攻撃禁止などの条項が含まれる。しかし、中国とアメリカが対立し、具体的な進展はない。さらに、核兵器の開発、実験、製造、貯蔵、移転、使用および威嚇を全面禁止する「核兵器禁止条約」構想もある。この条約の最終ゴールは保有核兵器をゼロにすることであり、条約交渉の早期開始の必要性が毎年国連総会で確認されている<sup>(16)</sup>。NPT (Nuclear Non-Proliferation Treaty: 核拡散防止条約) は、アメリカ合衆国、ロシア、イギリス、フランス、中華人民共和国の5カ国以外の核兵器保有を禁止する条約だが、不平等条約の典型である。

#### IV

2009年6月4日、オバマ大統領は、エジプトの首都カイロで、イスラム社会と新しい時代を創造しようとする演説をしている。宗教間の融和を訴え、人種、宗教、身分にかかわらず、平和で安全に暮らすことこそ、全人類の望みであるとの信念を述べた。しかも、協調してこそそのような社会が創造できるということを訴えた。しかしながら、アルカイダーのような過激主義は決して認めないとも断言している。その他、民主主義、女性の権利、言論の自由等についても語っている。このカイロ演説の核心部分は演説の最後に述べられているように、「平和を促進するためにある」トーラー (ユダヤの律法、教え) に触れ、<sup>(17)</sup> さらに「平和を実現する人々は幸いである。彼らは神の子と呼ばれるからである」<sup>(18)</sup> との聖書の言葉を引用して、「世界の人々が共に平和に暮らすことこそ神のビジョンであり、それが地上で私たちのなすべき仕事である」<sup>(19)</sup> と締めくくっている箇所であろう。イスラム教もキリスト教も、その根本は平和創造であり、その平和創造の実現に関わるからこそ、私たちがこ

の地上でなすべき働きであると述べるく  
だりは、オバマ大統領らしい共生の思想  
が表現されている重要な部分である。

オバマ大統領が生まれたアメリカはア  
メリカン・ドリームの国であり、自由と  
平等の国であり、オバマ大統領もこのよ  
うなアメリカの理念を信奉している。こ  
のような国だからこそ自分も大統領に選  
出されたと認識している。

しかしながら、アメリカには奴隷制を  
はじめとした様々な醜い歴史があること  
をも直視する必要がある。1800年代  
から白人支配層によって、多くの黒人が  
医学的・科学的実験に使用された歴史が  
あり、こうした事実を黒人はよく知って  
いる。しかし、白人はそのような歴史を  
知らない。トマス・ジェファークソン第三  
代大統領の奴隷も含むが、数百人の黒人  
奴隷を、天然痘の実験のためにモルモッ  
トとして使用し、沸騰した湯を脊髄に注  
いだり、肺腸チフス軽減のための人体実  
験を行ったりした。また、婦人科関連の  
手術を完成させるために苦痛を伴う実験  
に女性奴隷を使用した。1945年には、  
被爆の危険計測目的で、テネシー州オー  
ク・リッジ陸軍病院で、黒人患者にプ  
ルトニウムを大量投与。1963年、ブル

ックリンの病院で、アメリカ公衆衛生局  
およびアメリカがん協会の実験として、  
黒人患者に本人が知らない間に生きたが  
ん細胞を注射。オレゴン州の刑務所では、  
黒人受刑者に睾丸の放射線治療を実施。

1950年代初め、黄熱病と百日咳に感  
染した蚊を数百万匹も育て上げ、黒人居  
住区にばら撒いた。当然奇病が発生し、  
多数の死者が出た<sup>(20)</sup>。

したがって、オバマ大統領にとって、  
戦場は海外だけではあるまい。オバマ政  
権批判の中には、選挙運動中にオバマ夫  
妻が「大統領執務室で銃を持ったイスラ  
ム教徒のテロリスト」のように描かれた  
り、「オバマよ、ケニアに帰れ」のプラカ  
ードがあったりと、黒人大統領への露骨  
な軽蔑・差別感情がある<sup>(21)</sup>。さらには、  
「オバミュニズム」(オバマとコミュニ  
ズムを合成した語)、医療保険に「オバマ  
ケア」(ヘルスケアをもじった表現)など  
の表現も聞かれ、明らかに黒人大統領に  
対する嫌悪感が存在する証左となってい  
る<sup>(22)</sup>。このような白人の抵抗に敗北し、  
白人の白人による白人のためのアメリカ  
を創造するようでは、「変革」を訴え、  
「Yes, we can!」で黒人を含むアメリカ  
人に約束した歴史的使命・意義が吹き飛

んでしまうだろう。差別のない、人種的にも平等なアメリカを建設するという歴史的使命がオバマ大統領には課せられている。大統領といえども白人の内面まではもちろん支配できないが、白人側があまりにも人種差別的な表現、行動に終始するならば、歴史を逆戻りさせ、人種差別が根付くアメリカを再創造することに繋がりかねない。

オバマ大統領も、司法長官、国連大使、通商代表、ホワイトハウスの補佐官やアドバイザーなどに黒人を指名しているが、白人も多く起用し、「ホワイトハウス」（建物自体の色が白っぽいのでホワイトハウスと名付けられていると言われる）が「ブラックハウス」とならないよう気を遣っているようである<sup>(23)</sup>。大統領選挙では、白人投票者の43%<sup>(24)</sup>、黒人投票者の95%がオバマに投票している<sup>(25)</sup>。オバマ大統領自身は、最初から特に黒人を優遇する政策は行わない方針であった。しかし、あまりにも白人の要求に迎合するような舵取りをするという事態に陥るならば、それこそ「平等」の実現を目指す民主党の政治思想<sup>(26)</sup>と矛盾することになる。「民主党も共和党もなく両党とも『ビジネス党』だ！」と言語

学者のチョムスキーは風刺し、また、特に戦争で自分の息子を失ったアメリカ人家族は、「どちらの党も『戦争党』である」と厳しいネーミングを創造している<sup>(27)</sup>。あながち的外れなネーミングではあるまい。

なぜ、支持率が低下しているのか。もちろん、経済的な好転がないこともある。しかしながら、それだけでは説明できない現実がある。白人が黒人の顔写真を30ミリ秒（1000分の30秒）見せられると脳に恐怖を感じる、というような世論調査さえある<sup>(28)</sup>。やはり、人種的な差別・偏見が依然として蔓延している。その意味で、オバマ政権の最大の難問の一つは人種問題・差別問題であり、「核なき世界」創造に加えて、「差別なき世界」を創り出す仕事を避けることはできまい。世界の現状がオバマ大統領に「核なき世界」宣言をさせているように、アメリカの差別・偏見に満ち満ちたアメリカ社会そのものの現実が「リベラルのアメリカも保守系のアメリカもない…あるのはアメリカ“合衆国”なのだ。黒人のアメリカも白人のアメリカもラテン系のアメリカもアジア系のアメリカもない。あるのはアメリカ“合衆国”なの



だ」の演説を生み出している、と認識するのが妥当であろう。

## V

世界にはおよそ2万6000発もの核兵器が貯蔵、配備されている<sup>(29)</sup>。アメリカの歴史家ヘンリー・アダムズは、1862年に「科学が発達し、いずれは人類が地球を滅ぼして自殺を遂げるだろう」との予測をしているが<sup>(30)</sup>、現存する核兵器が使用されるならば、これは現実味を帯びた予測となる。核を限定的に使用する段階で止めるのは困難で、いったん核兵器が使用されると、全面核戦争になる可能性が高い。したがって、核を保有する世界の指導者が核を使用しなければならぬ場面に直面するならば、究極の決断、つまり「共存」か「絶滅」を選択しなければならなくなる<sup>(31)</sup>。

アメリカ独立宣言の「すべての人間は平等に造られている(…all men are created equal…)」の文言を知らないアメリカ国民はいない。しかしながら、すべての人間の中に有色人種や女性が含まれていなかったのも事実である。

有色人種がアメリカ最高の公職に就いたことで、アメリカらしい歴史が創造されたのである。これまで白人の大統領しか存在しなかったことは、むしろアメリカ独立宣言の精神に反する歴史だったと言いたくもなるが、オバマ大統領の登場だけで人種差別が完全に解消されるほど単純な問題でない。したがって、オバマ大統領だけではなく、人種を問わずすべてのアメリカ国民が、この文字通りの「差別のないアメリカ造り」に参画する歴史的責務・使命を負わされていることを自覚する時でもある。オバマ大統領が歴史を逆戻りさせず、キング牧師の訴えた「皮膚の色ではなく内なる人格で評価される国」<sup>(32)</sup>、「差別なき世界」に少しでも近付け、「核なき世界」創造を世界中の国々の協力を得つつ進め、ノーベル平和賞受賞者に相応しい足跡を残せるよう祈りつつ筆を擱く。

注

(1) テイム・ワイズ著 上坂昇 訳 『オバマを拒絶するアメリカ レイズム 2.0 にひそむ白人の差別意識』 明石書店 東京 2010 pp.184-185

(2) Barack Obama Dreams from My Father A Story of Race and Inheritance  
Three Rivers Press New York 2004  
p.xii “I won’t try to describe how deeply I  
mourn her passing still I know that she was  
the kindest, most generous spirit I have ever  
known, and that what is best in me I owe to  
her.”

(3) Dreams from My Father A Story of  
Race and Inheritance pp.31-32 “...On a  
three-day stopover in Japan, we walked  
through bone-chilling rains to see the great  
bronze Buddha at kamakura and ate green  
tea ice cream....”

(4) The Japan Times Saturday, August 21  
2010 “President Obama is a Muslim.” “He’s  
not an American citizen.” “He wasn’t even  
born here.”

(5) 『オバマ演説集』朝日出版社 東京  
2009 p.45 Keynote Address at the  
DNC: The Audacity of Hope “...Well, I say  
to them tonight. There’s not a liberal  
America and a conservative America—  
there’s the United States of America. There  
’s not a black America and a white America  
and Latino America and Asian America—  
there’s the United States of America.”

(6) Barack Obama 著, 棚橋志行 訳『チ  
ェンジ 合衆国再生に向けた政策プラン  
の全貌』ダイヤモンド社 東京 200  
9 p.300

(7) 『オバマを拒絶するアメリカ レ  
イシズム 2.0 にひそむ白人の差別意識』  
p.186

(8) 『オバマを拒絶するアメリカ レ  
イシズム 2.0 にひそむ白人の差別意識』  
p.112

(9) Dreams from My Father A Story of  
Race and Inheritance pp.437-439 “We  
hold these truths to be self-evident. ...the  
struggles of Martin...to bring these words to  
life...Black and white, they make their  
claim on this community we call America.  
They choose our better history.”

(10) Barack Obama CHANGE WE  
CAN BELIEVE IN Barack Obama’s Plan to  
Renew America’s Promise Three Rivers  
Press New York 2008 p.131 “Barack Obama  
fully supports reaffirming this goal—as  
called for by George Shultz, Henry  
Kissinger, William Perry, and Sam  
Nunn—and the specific steps they propose  
to move us in that direction.”

(11) 富田宏治/高草木博/野口邦和/

李俊揆 著『核兵器はなくせるか? Yes, We Can!!』かもがわ出版 京都 2009 p.21

(12) CHANGE WE CAN BELIEVE IN Barack Obama's Plan to Renew America's Promise pp.267-268 "This is the moment when we must renew the goal of a world without nuclear weapons...to stop the spread of nuclear weapons...This is the moment to begin the work of seeking the peace of a world without nuclear weapons"

(13) 『核兵器はなくせるか? Yes, We Can!!』 p.28

(14) [http://www.nikkei.co.jp/senkyo/us2008/news/20090423u0c4n001\\_23.html](http://www.nikkei.co.jp/senkyo/us2008/news/20090423u0c4n001_23.html) "So, finally, we must ensure that terrorists never acquire a nuclear weapon. This is the most immediate and extreme threat to global security. One terrorist with one nuclear weapon could unleash massive destruction. Al Qaeda has said it seeks a bomb and that it would have no problem with using it. And we know that there is unsecured nuclear material across the globe. To protect our people, we must act with a sense of purpose without delay."

(15) 川崎哲 著『核拡散一軍縮の風は起こせるか—』岩波書店 東京 2003 p.82

(16) 『核拡散一軍縮の風は起こせるか—』 pp.143-156

(17) 『オバマ「核なき世界」演説』朝日出版社 東京 2009 p.84 "...The Talmud tells us, The whole of the Torah is for the purpose of promoting peace."

(18) 『オバマ「核なき世界」演説』p.84 "...The Holy Bible tells us, Blessed are the peacemakers, for they shall be called sons of God."

(19) 『オバマ「核なき世界」演説』p.84 "...The people of the world can live together in peace. We know that is God's vision. Now that must be our work here on Earth."

(20) 『オバマを拒絶するアメリカレイシズム 2.0 にひそむ白人の差別意識』 pp.164-168

(21) 『オバマを拒絶するアメリカレイシズム 2.0 にひそむ白人の差別意識』 pp.188-189

(22) 『オバマを拒絶するアメリカレイシズム 2.0 にひそむ白人の差別意識』 p.193

(23) 『オバマを拒絶するアメリカ

レイシズム 2.0 にひそむ白人の差別意識』 p.208

(24) 『オバマを拒絶するアメリカ  
レイシズム 2.0 にひそむ白人の差別意識』 p.12

(25) 『オバマを拒絶するアメリカ  
レイシズム 2.0 にひそむ白人の差別意識』 p.208

(26) 松尾式之 著 『アメリカの永久  
革命 共和党と民主党が生むダイナミズム』 勉誠出版 東京 2004 p.12

(27) 成澤宗雄 著『オバマの危険—新  
政権の隠された本性』 株式会社金曜日  
東京 2009 p.70

(28) 『オバマを拒絶するアメリカ  
レイシズム 2.0 にひそむ白人の差別意識』 p.116

(30) 『核兵器はなくせるか? Yes,  
We Can!!』 p.13

(30) 本間長世 著『アメリカ大統領の  
挑戦』 NTT 出版 東京 2008 p.ii

(31) The Japan Times online  
Sunday, Apr26, 2009 Readers in Council  
Coexisting or co-perishing by Hiroshi Noro  
“...Every world leader should be aware that  
the Earth could be destroyed by a nuclear  
war. Therefore, they must choose coexisting

or co-perishing before making any decision  
to use a weapon of mass destruction since  
the decision is directly linked with the fate  
of our planet.”

(32)

<http://dreamer1.hp.infoseek.co.jp/dream.htm>

1 “...I have a dream that my four children  
will one day live in a nation where they will  
not be judged by the color of their skin but  
the content of their character.”